

幼少のころの記憶と家族

私は昭和八年（一九三三）に、父三宅松三郎^{まつざぶろう}、母与志江^{よしえ}の五男として生まれました。昭和八年といえば、昭和六年に満州事変が起こり、昭和七年に五・一五事件が発生した翌年で、日本は太平洋戦争に向かつて軍国化の一途をたどっていたころです。

現住所である三宅松三郎商店の住宅兼工場でお産婆さんによって取り上げられた私の誕生日は、昭和八年三月二十九日とされていますが、当時のことなのでまだまだ戸籍の管理すらままならなかった頃ですから、実際には四月の生まれであったと後から聞いたことがあります。

兄弟は長女梅香^{うめか}、二女つや子、長男積男、二男善雄^{よしお}、三男松太郎^{しょうたろう}、四男忠正^{ちゅうせい}、三女すぎ子、私（隆）の五男三女でした。

兄たちは商業学校を卒業して、家業に従事していましたが、長兄積男は召集され出征し、私が幼稚園の時に北支で戦死しました。次兄善雄も出征して満州で戦傷し、帰国後入院しました。三兄松太郎は内地で終戦、四兄忠正は朝鮮で終戦を迎え、ロシアに抑

留されました。終戦時、私は旧制中学生でした。戦後、兄善雄は多香子と、松太郎は澄子と、忠正は愛子と結婚し、両親と三夫婦とつや子で家業に従事、そのほか近隣の方々、住み込みの方々、多い時には十数人で仕事をしていました。

父は阿知麻呂様^{あちまろさま}（阿知五輪塔）の世話人を務めるほどきつぷのいい人で、面倒見がよかったです。私から見るとええかつこしいとしか思えなかったですが、水争いをして仲たがいでいた隣村の火事の時も、率先して火を消しにいくような人で、村の人たちも「松三郎さんが火消しに行くんだったら仕方がない。俺たちも手伝おう」というほど、人望はあったようです。

仕事でも「とことん品質にこだわる人」で、口癖は「見本よりいいものを納めんといかん」でした。鮮やかな花ごぎの色を生み出そうと、暇さえあれば新しい染料の配合を研究していました。そのことが染色工芸家の芹澤銈介氏との縁を生んだのだと思います。母はねずみ年生まれだからか、コツコツとまめに働く人でした。家業を手伝いながら家事もしてと、いつも忙しく動いていた姿が脳裏に浮かびます。

大勢の方々のご指導、ご愛顧のおかげで、昭和二十六年二月に株式会社になりました。それを見届けた父松三郎は同年三月に亡くなりました。三男松太郎が継ぎ、皆で協力して仕事に励みました。

戦中戦後の暮らし

今では私の子供の頃の話をする友達も少なくなりました。

小学校時代は戦時中だったので、「ホシガリマセン カツマデハ」の通り、修学旅行はなく、昭和二十年の卒業式の歌は「蛍の光」ではなく、「海ゆかば みずくかばね」を歌いました。中学校も修学旅行はありませんでした。

中学校に入っても白いシャツは禁止でした。ズボンにゲートルを巻いて教練があり、「エイヤー」の掛け声で銃剣（木製）を前に突き出す訓練がありました。

西阿知は田舎なので空襲には遭いませんでしたが、岡山、高松、福山と夜に街が燃えているのを見て、その街の方向を知りました。焼夷弾の爆撃時間の恐ろしかった記憶でした。水島の航空機工場の爆撃の黒煙も大変でしたが、酒津の工場に向かう単発機が低空飛行で通過するのも恐ろしかったです。

※酒津の倉敷紡績の工場は水島の航空機協力工場となり、女学生が動員されていました。当時倉敷女学校生だった人の話によると、ヤスリかけの仕事をしていたそうです。

昭和二十年八月十五日、終戦。世の中がひっくり返りました。今まで真っ暗だった夜に、電気をつけられるようになり、警報の度に防空壕に逃げなくてもよくなりました。

使っていた教科書の不都合な部分を墨で黒く塗りつぶし、戦争中とは正反対のことを言う先生が信じられなくなりました。

食糧難は今では考えられないほど、本当にひどかったです。中学校のお弁当も、どんぐりの粉を入れて作ったうどんを細かく切って、雑穀ごはん（米や麦は少し）に混ぜてかさを増したものでした。そんなお弁当でも持って来られない子はたくさんいて、その子たちは昼食時にはそっといなくなっていました。

汽車通学も無茶苦茶でした。プラットホームに入ってくる列車がダルマのように見えました。デッキの外にぶら下がった人、人、なのです。降りる人がいなければぶら下がる場所がありません。時には連結部の外の前後車両の足の乗せられる所に乗って、列車の雨どいを持っていました。下はレール、枕木。左右の手足の揺れが別々で、レールの継ぎ目、特にポイント通過のときは複雑な揺れでした。これは経験した者でなければ分からない面白い揺れでした。

この町は藺草から出来る藺草製品の町でした。畳表・上敷き・花むしろ・寝ゴザ・藺草枕・すだれ・捺染もの（主に輸出された）・ゴザ座布団・角マット・円座など。その他大小の雑貨、例えば田植えの時に着る蓑・一升瓶にかぶせるサック・テーブルセンター・バッグ類（大小の袋物）等々……。

年寄りから子供まで、男女それぞれに仕事がありました。子供ができるでござ（手伝い）は、藺草の束に跨いにするモトヌキと、藺草のゴミで焚く五右衛門風呂焚きでした。藺草のゴミは燃やしても火力がないので、風呂を沸かすのに時間がかかりました。たくさん藺草をくべると逆火がきて危ないのです。逆火で眉毛がチリチリに燃えた覚えがあります。

子供の遊びの中にも藺草がありました。捨てられた藺草で縄をなつて、三つ編みのひもにして、それを束ねてほうきのまねごとを作ったり、かまぼこ板に糸を張り、ゴザ織りのまねごとをしたりもしました。一本の藺草をひものように使い、七夕の短冊を藺草で竹笹にくくつたり、大川の土手でゴザを持つての土手滑りもしました。また、カド（庭先）でのママゴトでは、ゴザを敷けばそこがお座敷にもなりました。

当時は戦後の混乱期でした。私は高校在学中から家業の手伝いをしていたので、卒業後は兄達を助け、家業に従事しました。兄嫁（松太郎の奥さん）の妹の操と結婚し、一男二女をもうけました。



左から 長女 正子 長男 明 二女 直子
西阿知 遍照院三重塔
修理落慶記念大法要にて
（昭和42年10月）